

学部・研究科等の研究に関する現況分析結果

1. 工芸科学部・工芸科学研究科

研究 1-1

工芸科学部・工芸科学研究科

I	研究水準		研究 1-2
II	質の向上度		研究 1-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準にある

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、論文発表数が教員一名当り年間 1.72 件、著書 0.22 件と安定しているが、解説等は 4 年間で減少傾向にある。研究資金の獲得状況については、平成 18 年度科学研究費補助金への申請件数は教員一名当り 0.84 件、採択率は 16.7%で、いずれも全国平均を下回る（基礎資料 A 1 大学情報データベース）。一方、企業等との受託・共同研究費は 4 年間で増加しており、特許等の出願数が増加している。これらのことから、研究活動の方向性が当該学部・研究科の目標である地域に根ざした実学的性格を反映しているなどの相応な成果である。

以上の点について、工芸科学部・工芸科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、工芸科学部・工芸科学研究科が想定している関係者の「期待される水準にある」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

2. 研究成果の状況

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、応用生物学、生体分子工学、複合化学、環境デザイン、造形科学等の分野で先端的な研究成果が生まれている。卓越した研究成果として、例えば、昆虫モデルを用いた生体機能の解析－昆虫の性ホルモン受容体遺伝子の構造解析や昆虫の多角体たんぱく質の原子構造の解析が挙げられ、世界的に高く評価されて

いる。複合分野におけるゾルーゲル転移法を活用したカラム材料作成方法の研究とその応用に関する研究は、掲載媒体のインパクトファクターが 17.113 と高い。また、建築計画・環境デザインの分野におけるマンションに関する景観施策の変遷と事例に関する研究及び建築協定地区における住環境管理システムに関する一連の研究は学会賞を受賞し、京都に拠点を置く当該学部・研究科ならではの卓越した研究成果が上げられている。社会、経済、文化面では、卓越した研究業績は見られなかったものの、複合化学分野で行われた天然素材プラスチックに関する一連の研究は、化石燃料からの脱却に向けたバイオベースマテリアルの開発研究として社会・経済に及ぼす影響は大きく優れた研究成果を上げていることなどは、優れた成果である。

以上の点について、工芸科学部・工芸科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、工芸科学部・工芸科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間における判定として確定する。

II 質の向上度

1. 質の向上度

平成 16～19 年度に係る現況分析結果は、以下のとおりであった。

[判定]

相応に改善、向上している

[判断理由]

「大きく改善、向上している」と判断された事例が 1 件、「相応に改善、向上している」と判断された事例が 2 件であった。

上記について、平成 20 年度及び平成 21 年度に係る現況を分析した結果、平成 16～19 年度の評価結果（判定）を変えうるような顕著な変化が認められないことから、判定を第 1 期中期目標期間終了時における判定として確定する。

